



カウンセリングルームだより

Vol. 37 (2012年2月発行)



NHK クローズアップ現代 (2012.2.14 放送)

“産みたいのに産めない” ～卵子老化の衝撃～ その2

女性の社会進出につれ晩婚化が進み、35歳を過ぎて不妊治療を始め、初めて「卵子の老化」を知る人が増えている。平均寿命が80歳を超え、40代の“モテ期”や“美魔女”など、老いすらもコントロールできるようになったかに見える現代。しかし、今も老いを克服できないのが、ヒトの卵子だ。こうした中、若いうちに卵子を凍結し、いつか出産をという未婚女性も現れ、医療現場では卵子の老化を「止める」研究が進む。しかし、卵子の時を止めれば問題は解決するのか？これまで知られてこなかった卵子の老化と、女性達を取り巻く現実を通して、「適齢期に産める社会」に必要なものは何かを考える。

知られていない 卵子の老化

卵子は胎児のときに最も数が多くて、そして50歳位でゼロになるまで、どんどん減少して行きます。減少するだけではなく、染色体という遺伝のもとになっているところの、過不足が年齢とともに増加してきます。それによって、妊娠が成立しない、妊娠能力がどんどんなくなっていくということが起こります。同じような原因で、流産も着床障害も受精障害も起こってきます。

しかし、社会がそのことを知りません。日本では、生殖に関する教育を全くしてこなかった。一般の人達は通常メディアを通じて不妊の知識を得ていますが、芸能人が例えば45歳で出産したニュースが流れると、自分も45歳で出産できると誤解される方が多いと思います。



医療法人社団 春音会

はるねクリニック銀座



)))



止められるか 卵子の老化

北九州市にある不妊治療クリニックでは、若い人の卵子を使って老化した卵子を若返らせる研究です。卵子の核を取り出し、それを若い人の卵子に移植する方法です。核の周囲が若返ることで卵子が成長しやすくなると考えられています。この方法については他人の遺伝情報が混じるのではないかという指摘もあります。基礎的な段階に限って研究が行われています。さらに進んだ応用技術では、摘出した卵巣の一部、卵胞と呼ばれる卵子のもとが数千個ついたものを、特殊な方法で培養して人の体内よりも数多く、質の良い卵子を育てられるといます。この技術は卵巣機能が低下した人への治療方法として開発されました。将来は卵子の老化に悩む女性達にも応用したいと考えています。

卵子の老化を社会の常識に

卵子の老化にどう向き合うか。社会全体で考えてもらおうという取り組みも始まっています。東京医科歯科大学の有馬牧子助教です。今作っているのが働く女性や企業の担当者に読んでもらうマニュアルです。女性が職場でキャリアを積む時期は卵子の老化や不妊症が起きやすい時期と重なることなど注意する点を年代別にまとめています。出産を望む女性が仕事とどう両立させればいいのか考えてもらうのが狙いです。女性の健康とワークライフバランスの両者を知り、知識を持つ人を増やしてサポート体制を企業にも作って欲しいと考えています。

産みたい時に産める社会を

出産には期限があることをまず知っていただくこと。今の女性たちは一生懸命勉強して、学歴も仕事も手に入れてきたわけですが、努力ではどうにもならないこともやはりある。人の生死などコントロールできないことがある。やはり子どもは授かりものという気持ちを持つこと、不妊は自分を責めることではないと考えていただきたいと思います。20代や30代の方であれば、今どうするかを考える機会になればと思います。

カウンセリングは毎週土曜日に実施しています。ご予約は受け付けまで。